

四大種に関する一考察 ——『俱舍論』と『成実論』をめぐって——

阿 部 真 也

色法の定義の一つに、「四大および四大所造」があることは周知のことである。これは阿含以来のものであり、部派仏教にも受け継がれていくものだが、四大の解釈は時代を経るに従い、また部派によって、変わっていく。本稿は、『俱舍論』と『成実論』を中心に、その解釈の違いについて考察を加えるものである。

1. 有部諸論書における四大種

まず、『俱舍論』以前の有部論書についてまとめておく。これについては、すでに櫻部建博士によって簡潔にまとめられているが、今一度確認しておくことにしたい¹⁾。初期の論書である『阿毘達磨集異門足論』には色に関して次がある。

謂四大種及四大種所造諸色。如是名為諸所有色。復次尽所有色。謂十色處及法處所攝色。如是名為諸所有色。(p. 412a)

「四大種と四大種所造の諸色を諸所有の色とする。また、十色處と法處所攝色を諸所有の色とする。」とある。十色處とは意と法を除いた五根と五境であり、法處所攝色とは無表色のことであろう。この部分だけでは無表と四大種の関係ははっきりしないが、色の定義において両者が出てくる点は注目すべきである。他の箇所では、六界に関する記述の部分 (p. 430b) では、『法蘊論』に説かれているとされていて詳しい記述はない。『集異門論』で時々挙げられている、同じく初期の有部論書である『阿毘達磨法蘊足論』にはより詳しい記述がある。色の定義については、『阿毘達磨集異門足論』とほぼ同じ記述だが (p. 501a)、六界の記述の部分では、次のようにある。

云何地界。謂地界有二種。一内。二外。云何内地界。謂此身内所有各別堅性堅類有執有受。此復云何。謂髮毛爪齒。乃至糞穢。復有所余身内各別堅性堅類有執有受。是名内地界。云何外地界。謂此身外諸外所攝堅性堅類無執無受。此復云何。謂大地山。諸石瓦礫蚌蛤蝸牛。銅鐵錫鐵。末尼真珠。琉璃螺貝。珊瑚璧玉。金銀石藏杵藏。頗胝迦。赤珠右旋。

沙土草木。枝葉花果。或復有地依水輪住。復有所余在此身外堅性堅類無執無受。是名外地界。前内此外。総名地界（pp. 502～503）。

ここでは、地界を、内の地界と外の地界の二つに分けている。内の地界は、髪、毛、爪、齒等の人間の肉体に属するものであり、外の地界は、大地、山、石、瓦等の外界にあるもの、として、内と外合わせて地界である、とする。水界以下についても、同様に内と外に分けている。この内と外の分類は、阿含にもあることが櫻部博士によって指摘されている。どちらにしても、ここでは具体的な物質を指すと説いている。しかし、同じ『法蘊論』の別の箇所では異なる説がある。

謂四大種。及四大種所造。滑性。澁性。輕性。重性。冷暖飢渴。及余所有身根所覺身識所了。所有名号。異語増語。想等想。施設言説。謂名触。名触界。名触處。名彼岸。（p. 500c）

この箇所は触処について論じている部分である。触処の内容について、四大種と四大種所造の滑性、澁性、輕性、重性、冷・暖・飢・渴などを挙げている。すなわち、四大種を具体的な物質ではなく、その性質あるいは身根による感触であるとしている。同じ論書の中で、二つの異なる解釈がなされている。以上のように、初期の論書においては、具体的な物質とする説と、その物質の感触とする説の両方が出現している。それが、『阿毘達磨品類足論』になると、具体的な物質であるとする説は無くなる。

地界云何。謂堅性。水界云何。謂湿性。火界云何。謂暖性。風界云何。謂輕等動性。（p. 692c）

「地界は堅性、水界は湿性、火界は暖性、風界は動性の四の性質である。」とする。さらに、次のようにある。

謂触處堅湿暖動非大種所造。（p. 757a）

「触処の堅、湿、暖、動、は大種所造ではない。」とあるように、触処に属するとしている。そして、これが有部の定説となる。『阿毘達磨發智論』になると、四大種について、かなりまとまった記述が出てくる（p. 984a～）。その中に、次のようなものがある。

地云何。答顯形色。地界云何。答堅性触。水云何。答顯形色。水界云何。答湿性触。火云何。答顯形色。火界云何。答暖性触。風云何。答即風界。風界云何。答動性触。地水火風。幾處所攝。幾識所識。答地水火。一處攝。謂色處。二識識。謂眼識意識。風一處攝。謂

(196)

四大種に関する一考察 (阿 部)

触処。二識識。謂身識意識。地水火風界。幾処撰。幾識識。答一処撰。謂触処。二識識。謂身識意識。(pp. 986c ~ 987a)

「地とはいろやかたちであり、地界とは堅性の感觸のことである。」とする。水、火も同様に説明している。風のみが他の三と違って、「風とは風界である。」として二者を別のものとしていない。風と風界については『俱舍論』に説明があるので、後で見ることにする。そして、「地・水・火は色処におさめられ眼識と意識とに認識される、風は触処におさめられ身識と意識とに認識される。また、地界・水界・火界・風界は触処におさめられ身識と意識とに認識される。」とある。ここでは、地・水・火・風と、地界・水界・火界・風界に分け、前者が具体的な物質を指し、後者はその性質を指すようにし、別なものとして扱っている。

以上のように、初期においては具体的な物質を指す説とその性質を指す説の両方が見られるが、発展に従って、その性質のみを指すようになる。

2. 『俱舍論』における四大種

では、発展した有部の四大種説について、『俱舍論』の記述に従って見ていくことにする。²⁾ まず、なぜ界 (dhātu) であるのか、については次のようにある。

自相 (svalakṣaṇa) および所造色 (upādāyarūpa) を保持する (dhāraṇa) から界 (dhātu) であり、四大種といわれる。(p. 8)

厳密には必ず界の意味を含んでいる、ということである。続く部分において、その作用 (karman) については、地界は保持 (dhṛti), 水界は包摂 (saṃgraha), 火界は熟成 (pakti), 風界は増長 (vyūhana), とする。また、自性 (svabhāva) は、順に、堅さ (khara), 湿りけ (sneha), 温かさ (uṣṇa), 動き (īraṇa) である、としている。明らかに、四大種を物質ではなく、その性質を指すとしている。では、具体的な物質を指す意味が無くなったのかと言えば、次に、先に見た『発智論』の記述と重なる記述がその名残りととどめている。

それでは、地などと地界などとはいかなる差別があるのか。「世間一般の呼び名 (loka-saṃjñā) として、地といえはいろ (varṇa)・かたち (saṃsthāna) である」たとえば地を示す時は、いろとかたちを示すからである。地と同様に、「水も火もまた」世間一般の呼び名としては、すなわち、いろとかたちをいうのである。「しかし、風はすなわち〔風〕界である」しかし、風界はそれがそのまま世間一般において風と呼ばれる。「また同様でもある」世間一般の呼び名として、地といえは、いろ・かたちであるのと同様

に、風もまた「いろ・かたちを示す場合もある。」黒風 (nīlikā vātyā), 団風 (maṇḍalikā vātyā) というように、(p.9. 「」は頌, [] は補いを示す.)

地という場合は、世間一般にいう具体的なものを指し、堅さという性質としての地界を示すことはない、というものである。水・火も同じように具体的なものを指すと言う。ただし、『発智論』と同様に、風界についてのみ、その区別がはっきりしないとしている。世親は、いろ・かたちを持つ風の例を挙げるにとどめている。ただし、その例の内容が、櫻部博士も指摘されているようにはっきりしない³⁾。世親は、風と風界の区別が成り立つ場合もあることを言いたかったとも考えられる。四大種と五根五境の関係については、次のようにある。

どれだけの界が大種を自性 (svabhāva) とし、どれだけが六種所造であるか。「触は二種である」大種と六種所造とである。・・・「その他の九色は六種所造である」五根界と四境とのこれら九界はただ六種所造である。(p.23)

触の一部が大種を自性とする他は、六種によって成り立つとしている。四大種があつて、それによって五根五境が成り立つ、とするものである。

以上、『俱舍論』においては、四大種はその性質のみを示すようになっている。しかし、それとは別に、地・水・火・風すなわち「界」が付かない場合は具体的な物質を指すとしている。また、五根、五境は四大種によって成立する、としているのである。

3. 『成実論』における四大種

最後に、『成実論』について見ることにする (大正 32)、『成実論』では四大種を仮に施設されたものであるとする点が、有部と大きく異なっている。次のような文がある。

又世人皆信諸大是假名有。所以者何。世人説見地嗅地触地味地。又經中説如地可見有触。又入地等。一切入中。是人見色不見堅等。又人示地色地香地味地触。(p.261b)

「世間の人々は四大が仮に施設されたものであると信じている。地を見、地を嗅ぎ、地に触れ、地を味わうと説くからである。經に、地は見ることができ触れることもある、と説いている。人は、物質的存在を見て堅等は見ない。また、人は、地の色、香、味、触感を示す。」とある。具体的な物質として扱っていて、堅等の性質とする説を認めていない。次に、因果関係によって仮に施設されたものであ

(198)

四大種に関する一考察（阿 部）

ることを示している文を二つ引用する。

佛自説堅依堅是地非但堅相。是故此非正因。又汝説色等從四大生。是事不然。所以者何。色等從業煩惱飲食姪欲等生。（p. 262b）

「仏は説く。堅と堅に依るものは地であり、堅の相だけではない。ゆえにこれは直接の原因ではない。色等は四大から生じると説くが、これは間違いである。色等は業、煩惱、飲食、淫欲などから生じるからである。」とある。

又如經中説以依堅故。示四大差別。故知依堅法。名為地種。非但堅相。故説堅相是成地因。又於成地中。堅是勝因。是故別説。余相亦爾。（p. 262c）

「經に、堅に依って四大の相違するところを示す、と説いているようにである。だから、堅に依る法を地種とするのであり、堅相のみではないのである。ゆえに、堅相は地を生じる因なのである。また、地を生じる時に、堅は特別な因であるから別に説くのである。他の相も同様である。」とある。有部では、四大から色が生じると説くが、『成実論』では色は業や煩惱などから生じるのである、とする記述がある。決して、物質の成り立つ根本要素として四大種を見てはいないのである。また、堅相は地を生じる原因である、として、そのものではない、とする。そして、四大について、

仮名因縁中。有仮名名字。（p. 263a）

として、あくまで仮に施設されたものであることを主張している。また、五境との関係については、次の文がある。

問曰。今地等大。皆是色香味触衆。無差別耶。答曰。不定。如名地中有色香味触。或但有色触。如金銀等。或水中有色香味触。或有三色味触。或火中有色香味触。或有三色香触。或但色触。風中或有触無香。或有香触。是故不定。（p. 265a）

「四大は色香味触が集まったもので違いはないのか。」「決まっていない。地の中には、色香味触があるもの、金銀のように色触のみのもの、がある。水の中には、色香味触があるもの、色味触の三つがあるもの、がある。火の中には、色香味触があるもの、色香触の三つがあるもの、色触のみのもの、がある。風の中にも、触があって香がないもの、香触があるもの、がある。」とある。ここからみても、色香味触によって四大が成り立っているとしていることがいえる。『俱舍論』等

では、四大によって五根・五境が成り立つとしていて、異なる説となっている。ただし、五根については、四大種によって成る、としている。

四大者。地水火風。因色香味触故。成四大。因此四大成眼等五根。（p. 261a）

まず、色香味触があり、次に四大種、そして、五根、という順番になっている。また、次のような記述もある。

從業因縁。四大成眼等根。是故不異四大。（p. 265b）

「業の因縁によって四大種は眼等の根を生じる。故に、四大種と根は異ならない。」とある。四大種によって五根が成り立つ、という点については有部と通じている。

『成実論』においては、あくまで四大種は仮設されたものであり、根本要素ではない。「界」の語が地等に使われていない点も、それを示していると考えられる。

4. 結語

以上、四大種について見てきた。『俱舍論』に見られる説は仏教独自のものであるが、『成実論』に出てくる説は、仏教以前からの四大種説の延長上にあると言える。また、業や煩惱を色の生じる原因としている点も注意すべきである。『成実論』に説かれる四大種は世俗的になっている。サーンキヤ派など外道のために四大種を説く、という記述があるのもその理由の一つかも知れない。有部によって四大種をその性質とする説が成立したが、阿含以来の、具体的な物質を指す説も無くなることはなかったと言える。

1) 櫻部建『俱舍論の研究』pp.93～96. 引用は全て大正 26.

2) “Abhidharmakośabhāṣya” ed. Pradhan 1967, 以下 AKBH. 訳は、櫻部建『俱舍論の研究』昭和 44 年、があり、本稿の訳文は基本的にこれに依っている。

3) 前掲書 p.161.

〈キーワード〉 俱舍論, 成実論, 四大種, 色, 界

(大正大学総合佛教研究所講師)